



ルービン氏はジャパンファウンデーションが2006年3月に行なった国際シンポジウム・ワークショップ「春樹をめぐる冒険—世界は村上文学をどう読むか」に出席し、世界17カ国23人の翻訳者や出版者、作家と、村上作品の魅力や各国での翻訳・出版状況、読まれ方などについて語り合った。写真は同シンポジウムで、マイクを持ち、発言する筆者

撮影：高木あつ子

# The Murakami Aeroplain

村上春樹氏のおコナー賞授賞式に出席して

ジェイ・ルービン  
Jay Rubin  
翻訳家

2006年9月、村上春樹氏はアイルランドの国際的文学賞「フランク・オコナー国際短編賞」を受賞しました（受賞作は*Blind Willow, Sleeping Woman*）。その授賞式に出席した村上作品の翻訳者ジェイ・ルービン氏に、受賞の意義や村上作品の翻訳に関する考察を寄せていただきました

『ねじまき鳥クロニクル』に着想を得た音楽たち

大方の人も同じかどうかはわからないが、私の場合は一日中、毎日、バックグラウンドに何かしら音楽が流れていることが多い。ほかの人にも聞こえるような音楽ではなく、脳内の音で、たいていは最近耳にした曲のうち思い出すメロディである（いわゆる「BGM」は好きではない。私は音楽を聴くときは耳を傾け、ほかのことはしないのだ。この1週間ばかり頭の中を流れている音楽の出所は、コペンハーゲンで作曲家マッシーモ・フィオレンティーノから贈られた一枚のCDである。彼は1973年にイタリアのナポリで生まれ、デンマークで育った。

運よく彼に出会ったのは、2006年9月28日の夜のことだ。デンマーク—日本協会で、村上春樹作品の翻訳について私が講演するという非公式のイベントに来てくれたのである。

その日、私はダブリンからデンマークに到着したばかりだった。アイルランド国立博物館では驚くほど精巧なバイキング船の模型を目にして、ダブリンが841年にバイキングによって創

マッシーモ・フィオレンティーノのCD『Aeroplain: the wind-up bird chronicles』。村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』に着想を得てつくられた曲が収録されている。曲目は次の通り。

- The Wind-up Bird Theme
- Quiet
- Mr. Wind-up Bird
- Kumiko
- Music of Words (The Creta Cano Song)
- Reunion
- The Well
- Jellyfish From All Around the World
- A Dangerous Place
- Goodbye, May Kasahara



建されたこと、彼らはそこを Dutch Limb (黒い水たまり) と命名したことを学んでいた。数日後には、デンマークのロスキレにあるバイキング船博物館を訪れ、船の破片を再び組み立てたという、最初に見た船と驚くほどそっくりのバイキング船を目にすることになる。その船はダブリンで建造され、北海を渡ったのちにロスキレ峡湾で沈められたのだ。

今回の旅で妻と私はワシントン州シアトルから出発し、第二の立ち寄り先がダブリンだった。最初の訪問先のアイルランドのコークにおいては9月24日の夜にフランク・オコナー国際短編賞に村上春樹が決まったと発表された。コペンハーゲンでは第三の立ち寄り先であり、村上作品をデンマーク語に訳しているメッテ・ホルムさんに会いに行くのが目的だった。ホルムさんとは06年3月に東京で開催された村上春樹国際シンポジウムで知り合った。デンマーク―日本協会における講演も彼女が手配してくれて、そこでマッシモ・フィオレンティーノが自作を収めたCDを私に手渡してくれたのだ。

CDのタイトルは“Aeroplain: the wind-up bird chronicles”と、収録

曲は「日本の作家村上春樹が書いた『ねじまき鳥クロニクル』に着想を得て、その作品をめぐって」、01年12月から03年1月のあいだにコペンハーゲンで作曲したという(本人が自分のウェブサイトで次のように説明している。「この“Aeroplain”は“Aeroplane [飛行機]”のミスタイプではありませんが、このよくある間違いと戯れていることは確かです。これは“aero”と“plain”の合成物で——いろいろな意味で音楽を表現しています)。ライナーノートで次の一節を読んで私

が感激したことは言うまでもない。「この素晴らしい小説を書いた村上春樹と、それを見事に翻訳したジェイ・ルービンに最大の感謝を」。

言い換えれば、私の頭の中を絶え間なく流れている音楽は——私の翻訳によって促進された面もある、このシンブルだが心を打つメロディは、村上が書いた一編の短編小説のようにたちまち心を捉え、憶えやすい——多くの人と出来事が驚くべき国際的合流を遂げた成果であり、その中心に村上春樹がいる。これがグローバリゼーションならば、私は大賛成である。その結果、この書き出しの一節がかなり長くなることもあるとはいいえ。

## グローバリゼーションの中にある文学賞

ある日本人作家のノーベル賞に対する権利を確立しようとする半官組織の発想ではないかと疑う者も我々の中にはいたが、たとえそうだったにせよ、国際シンポジウム・ワークシヨップ「春樹をめぐる冒険——世界は村上文学をどう読むか」は素晴らしかった。とくに参加者にとっては。これは世

界中の翻訳仲間と出会う前代未聞の機会で、意見や感想のやりとりは公開イベントの最中だけでなく、食事や富士山麓の森を散策するあいだも行なわれた。これぞ「合流」の最たるものだ！半年後、デンマークのエスロムにてメッテ・ホルムさん、美しいお嬢さんのフェリシア、私の妻と一緒にエビの殻をむいている姿を写真に撮りながら、あのシンポジウムは独特の実りをもたらしたのだと私はしみじみ感じた。

68年に川端康成が「日本人



デンマークのエスロムで筆者の撮影した写真。テーブルを囲み、エビの殻むきをするルービン夫人、デンマーク語の村上春樹作品の翻訳者のメッテ・ホルムさんと彼女のお嬢さんフェリシアちゃん(左から) 写真提供: 筆者

の心の精髓、すぐれた感受性をもって表現するその叙述の巧みさ」に対してノーベル文学賞を授賞されたときと現在とでは、状況は大いに異なる。当時の西洋人は、日本人作家についてはこの上なく民族中心的な言葉で捉える用意しかなかった。94年に大江健三郎が「詩的想像力により、現実と神話が密接に凝縮された想像の世界をつくり出し、現代における様相を衝撃的に描いた」としてノーベル文学賞を授与されたときには、西洋の側も視野が広がっていただろう。そして06年9月にコーク市とマンスター文学センターが短編賞を村上に与えたときは、グローバリゼーションが真つ盛りとなっていた。

ガーディアン紙が報じたとおり、村上の受賞作である短編集*Blind Willow, Sleeping Woman*は三天陸にわたる選抜候補者リストのトップを飾った。アイランドの作家フィリップ・オ・キヤラー、アメリカ人作家レイチェル・シヤーマンはそれぞれ第一短編集が候補となり、ほかにイギリス人作家ロムラート・ウパディヤイ、ドイツ語で作品を書いているスイス人作家ペーター・スタムの短編集が挙がっていた。

### 「読者は魔法を求めて活字を手にする」

前年の受賞者は中国の作家だったから、今回は村上の受賞はないだろう。コークに到着したとき、私はそう思い込んでいた。政治的な予想から今年はいランド人の受賞者が誕生するだろうと私は考え、フィリップ・オ・キヤラーの短編集『トルコの売春宿より』を買ってライバルの品定めをした。その文章の明晰さに感心し、フェスティバル中にオ・キヤラーが聴衆に向けて朗読した短編小説に心を動かされました。

だから授賞式で「ハルキ・ムラカミ」という名前が発表されたときは驚愕した。決定要因となるだろうと私があやまっただけで考えていた類の政治的配慮や国に対する配慮などから審査委員会の審議がいかに自由であったかは、マンスター文学センターによるプレスリリースですでさらに鮮明に述べられている。

世界最大の短編小説賞に村上春樹を選んだ5名からなる選考委員会も、この賞の国際性を反映している。審査委員長はコーク在住の作家トム・マツカーシーが務め、ほかはアイルラン

ドの作家クレア・キーガン、イギリスの作家トビー・リット、現代ドイツでもっとも重要な詩人・作家の一人であるジルケ・シヨイヤーマン、そして英語による短編小説の国際コンファレンスの会長である米国の文学者モーリス・A・リー博士。選考について委員会は次のようなコメントを発表している。

「これは小説の名人によるまことに素晴らしい短編集である。村上は大いなる誠実さをもって書いている。……彼の文章が思い出させてくれるのは、最終的に、読者は魔法を求めて活字を手にするということである」

審査員のうち2名が別々に、私に強いられることなく話してくれたことによれば、決定は満場一致でなされ、そこには怨恨も不安もまったくなかった。だが最終審議はすんなりとはいかなかった。審査員たちはそれぞれの視点を持つて審議に臨み、最終リストに残った作家はそれぞれ強力な競争相手だったが、6人のファイナリストについて4時間半にわたって至極まじめに話し合った結果、審査員全員が村上を快く選出し

筆者が英語に翻訳した村上春樹の小説。右は*after the quake* (神の子どもたちはみな踊る)。左は*The Wind-Up Bird Chronicle* (ねじまき鳥クロニクル)



た。唯一の選考基準は芸術だった。

## 翻訳者の役割は ピアニストに似ている

外国語で書かれた文学を一流の英文の一部と比肩しようようにする際に翻訳者が果たす役割に今回の賞で着目していたことは、私（そして今回の受賞対象となった本に収録された作品の半数以上を訳したフィリップ・ガブリエル）にとつて格別ありがたいことであった。米国人の場合ほとくに、自己中心的な世界観と外国語のトレーニング不足から、異文化の文学を英語で読めるようにする過程で翻訳がいかに重要かを忘れがちである。

05年11月にシカゴのステッペンウルフ劇場で『神の子どもたちはみな踊る』(after the quake) が上演されたのちの討論会を、観客の一人として聞いていたときのことを思い出す。スタッフの1人が観客に対し、この翻案は忠実だということをごんごんに保証していた。「みなさんが耳にされた言葉は、99%、村上の言葉です」

いや、実際は観客が耳にした言葉のうち村上の言葉は1%未満、それも登場人物たちの名前だ。それ以外に耳に

した言葉はすべて、翻案したフランク・ギャラティもしくは訳した私が書いたものだし、私の英語が村上の日本語になんらかの形で「近い」ということについては、ギャラティも観客も聴呑みにせざるを得ないのだ。自分たちがどれだけ翻訳者に身をゆだねているのかをわかつている読者は少ない。扱われる二つの言語が英語と日本語ほど違うとき、それはとくに著しい。

私は翻訳者の役割をピアニストの役割にたとえるのが好きだ。ピアノ演奏会に来る聴衆の大半はオリジナルの楽譜を用いることはできず、作品を耳にするには演奏家に頼らざるを得ない。もちろん異なる音楽家による解釈の違いはたいへん刺激的でありうる。『悲愴』の録音を何百と購入して、強調や区切り法に関するピアニストごとの違いを次から次へと比較しながら、現実にはどの音楽家も成しえていない、いわば理想の解釈（演奏）を頭の中で構築することができる。

文学において同様のことをするのは、書籍出版をめぐる経済を考えるとほとんど不可能だが、19世紀ロシアの小説家に関してはその兆しが見えていると言えようか。村上作品について第二、

第三の解釈が登場するのはまだまだ先のことである。

## 「クロニクル」は単数か複数か という問題

村上の長編小説の中で、新訳——あるいは原作どおり復元した訳——を求める声をよく聞くのは『ねじまき鳥クロニクル』、もしくは私の英訳タイトルではThe Wind-Up Bird Chronicleだ。現行版（米国版と英国版がある）は、この作品は「日本語から英訳、翻案」であることを細かい文字で知らせているが、「翻案」の内容については何も示していない。私が著書『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』で説明したように、米国出版社アルフレッド・A・クノップ社が原作に比べて相当短縮することを重視していたため、私はどこかの編集者に任せるよりは（村上の助けを借りて）自分で短くすることにしたのである。以来、時おりクノップ社に対して、未編集版を出す機は熟したかもしれないと提案しているが、彼らは興味を示していない。

あの作品の完全版を出す場合、再考を要する点のひとつに、題名の“Chronicle”に“s.”をつけるか否かとい



筆者が書いた村上春樹の作家論・作品論「ハルキ・ムラカミと言葉の音楽」(群柳和代訳、新潮社)

→2006年の「春樹をめぐる冒険」では、東京でのシンボジウムのおと、訳者たちは山中湖で合宿し、交友を深めた。右からカナダのテッド・グーセン、筆者、ロシアのドミトリー・コヴァレーニン

▼同イベントの詳細は、柴田元幸、藤井省三、沼野充義、四方田犬彦編『世界は村上春樹をどう読むか』（文藝春秋）に収録されている



う問題がある。「chronicle」という言葉  
を英語の書名に用いるときには複数で  
使うならわしだから、多くの人はいま  
だにあの本の題名はThe Wind-Up Bird  
Chroniclesだと間違つて覚えている。  
オリジナルの日本語タイトルにある「ク  
ロニクル」は単数に聞こえるが、日本  
語の名詞は（外来語でさえ）複数形を  
持たないため、数については文脈を見  
て確認するしかない。  
逆の興味深い例として、村上がジャズ  
ミュージシャンについて著している2  
冊のエッセイ集『ポートレイト・イン・  
ジャズ』がある。こちらには英語のタイ  
トル *Portraits in Jazz* も記されている。実  
際には2冊とも何名かのジャズミュー  
ジシャンについて文章によるポートレ  
イト (portraits) を提供しているから、そ  
の文脈においては「ポートレイト」と  
いう言葉は複数ということにな  
り、英題は *Portraits in Jazz* とな  
るべきだ。

『ねじまき鳥クロニクル』を英訳し  
たとき、この長編小説がひとつの統一  
した物語であるという含みを持たせる  
ために、私は題名に単数を用いること  
に決めたが、英語版第3部の第25章と  
第26章（原作では第27章から第28章）でシ  
ナモンという登場人物が語り手にいく  
つかの「ねじまき鳥クロニクル」を提示  
する部分においては、複数形のほうが  
好ましいことを示す立派な証拠がある。

自作CDを“*Aeroplain: the wind-up  
bird chronicles*”と名づけているマッシ  
ーモ・フィオレンティーノに対して以上  
の点を指摘したところ、自分は作品に意  
図的に複数形を用いていると彼は主張  
した（実際、彼が記したノートでは、私の  
翻訳の題名にはちゃんと単数 “*Chronicle*”  
を入れて言及している）。彼の考えでは、  
「一つひとつのメロディ自体をひとつの  
クロニクルと見なしているため、CD  
全体については複数形を用いています。  
このことによりCDを小説から区別す  
ることができると同時に、CDを小説  
と結びつけることができるのです」。

以上のような文学の解釈上の些細な  
ことをめぐる国際的な協議（および私  
の頭の中をいまこの瞬間も流れているメロ  
ディ）を可能ならしめたのが、前述の  
国際シンポジウム・ワークショップ  
「春樹をめぐる冒険」なのである。

ワシントン州ベルヴェュー  
2006年11月15日  
（原文は英語、畔柳和代訳）

ジェイ・ルービン●1963年シカゴ大学極東研究学士号取得、  
70年国木田独歩に関する論文で博士号取得。シカゴ大学、  
ワシントン大学、ハーバード大学で教鞭を執る。主な翻訳に  
夏目漱石や芥川龍之介のほか、村上春樹『ねじまき鳥クロ  
ニクル』『ノルウェイの森』『神の子どもたちはみな踊る』など

引用  
・ノーベル文学賞を受ける理由  
川端康成（1968年10月8日  
朝日新聞1面より）  
・同、大江健三郎（1994年  
10月14日、朝日新聞1面より）  
注  
国際シンポジウム・ワークショ  
ップ「春樹をめぐる冒険」  
世界は村上春樹をどう読むか  
については「まちごと（遠近）」  
12号で特集しています。